

CONTENTS

- 2 神が喜ぶ夫婦 イ・ヨンフン牧師
- 4 今日のマナ チョウ・ヨンギ牧師
 - ・良い親、良い子ども
- 6 メッセージ 志垣重政牧師
 - ・聖靈充滿になれ
- 9 大きな絵でこの世を理解する キム・ジョンチョル監督
 - ・ユダヤ人大虐殺とナチスドイツと教皇
- 16 靈的リーダーシップ イ・ヨンフン牧師
 - ・自己否定、真のリーダーになる出発点
- 19 私の人生、私の証 ユン・チヨン牧師
 - ・「神様の愛だけが、神の御国の鍵である」
- 25 レビ記ライフ カン・デウィ 牧師
 - ・「私たちを記念するため、このように行いなさい」—— 素祭
- 31 狹き門、狭き道 カン・サン牧師
 - ・神様、私は何をしたらいいでしょうか？
- 36 コラム | あなたと共にいる キム・ソンイル小説家
 - ・あなたの名は勝利を得る者
- 45 統一時代を開く ベン・トレイ理事長
 - ・正しい質問
- 51 ドタバタ子育ての話 イ・ビョンジュン牧師
 - ・耳を傾けることのできる子どもに育てなさい

この「しなんげ」は、おもに韓国版信仰界 2021年5月号より抜粋して、翻訳し再構成したものです。ちなみに、聖書の御言葉は「口語訳」を引用しています。

神が喜ぶ夫婦

イ・ヨンフン牧師

コロナ禍以降、アメリカとイギリスの離婚率が増加しており、コロナ (Covid) と離婚 (Divorce) を組み合わせた「コビディボス (Covidivorce)」という造語が新たにできました。韓国の離婚率は上昇していませんが、それはコロナ禍による裁判所の休庭が続いたからです。コロナ禍以降、離婚に関する法律相談は大幅に増加したといいます。専門家は、時短勤務などにより狭い空間で一緒に過ごす時間が増えたことがその原因だとしています。一緒に住みたくて結婚したのに、一緒にいる時間が長くなつたゆえに離婚するのは、本当に残念です。

神様がご自身の意思を達成するために、男女二人を夫婦として一体にされたと聖書は語っています。神様は、お互いに助け合うものとして夫婦を創造されまし

た。ところが、私たちは自分のために結婚し、「助け合う夫婦」になるよりも、相手が私を「助けてくれる夫婦」になることを願っています。そのため、不満かつ不幸な結婚生活が続くことになり、そうしているうちに関係が難しくなり、やがて離婚に至るのです。

異なる環境で育ってきた二人が一体となるのは、簡単なことではありません。しかし、一つになった夫婦が受ける平安と喜び、有益は、実に驚くべきものです。神様が喜ばれる夫婦となれるように祈って、努力してみてはいかがでしょうか？ 結婚生活をとおして、神様の善良な計画を見つけて、完全に一体となるのであれば、この世のものではない真の満足と幸せを享受することでしょう。†



*今日のマナ



良い親は良い子供を育てます。良い親は親の欲で子供を養育することは決してしません。良い親は子供を特定の職業人に育てる前に、モリヤ山でイサクを捧げたアブラハムのように「神様の御心を行なってください」と、子供の将来をすべて神様に委ねます。神様に祈りながら、信仰によって養育することを知っています。

良い親は子供が神様のものであることを知っているので、常に愛にあふれ、人格を尊重します。このような親子の間には、愛による戒めと尊敬を土台とした従順があります。

場合によっては、子供を愛の鞭で打つこともあります、これは間違っていることではありません。なぜなら、聖書に「子を懲らすことを、さし控えてはならない、むちで彼を打っても死ぬことはない。もし、むちで彼を打つならば、その命を陰府から救うことができる」(箴言 23:13～14)と記されているからです。

近代史を紐解くと、良い親と悪い親からはどのような子供が育

チョウ・ヨンギ
ヨイド純福音教会元老牧師



良い親、良い子ども

つかを学ぶことができます。ヒトラーの母親は、夫が仕事で家にいない間、ユダヤ人男性と不倫関係を結んでいました。このことがヒトラーの心中にユダヤ人への深い憎悪を呼び起こしました。やがて彼は全世界を戦争に巻き込み、ついにはユダヤ人6百万人の虐殺に至りました。一方、私たちがよく知る世界的な伝道者ムーディーの母親は、夫が5人の子を残して世を去っても、少しも落胆したり失望したりせず、困難な生活の中でも信仰を持って子供たちを養育しました。「子供たちを孤児院に入れたほうがよい」という周囲の勧めを断って、彼女は次のように言いました。

「私の両腕にまだ肉がついている限り、子供たちを孤児院や親戚の家に送ることはしません。母親ほど子供のことを考え、子供のために祈る人はこの世には誰もいません」

このようにして、彼女の子供たちの中から、アメリカとイギリスを揺るがした偉大な主のしもべ、ムーディーが誕生したのです。立派な良い子は良い親から育ちます。†



聖靈充满になれ

— 使徒行伝 2章 1～4節 —

「五旬節の日がきて、みんなの者が一緒に集まっていると、突然、激しい風が吹いてきたような音が天から起ってきて、一同がすわっていた家いっぱいに響きわたった。また、舌のようなものが、炎のように分れて現れ、ひとりひとりの上にとどまった。すると、一同は聖靈に満たされ、御靈が語らせるままに、いろいろの他国の言葉で語り出した。」

イスラエルの三大祭りといえば、過越の祭、仮庵の祭、そして七週の祭とも呼ばれる五旬節がありますが、最初の疑問は、聖靈降臨以前に聖靈様の働きはなかったのかということです。決してそうではありません。「地は形なく、むなしく、やみが淵のおもてにあり、神の靈が水のおもてをおおっていた」(創世記 1:2)、「そこでパロは家来たちに言った、『われわれは神の靈をもつこのような人を、ほかに見いだし得ようか』」(創世記 41:38)、「主はモーセに言われた、『神の靈のやどっているヌンの子ヨシュアを選び、あなたの手をその上におき』」(民数記 27:18) にあるように、旧約時代にもその働きはありました。また、マリヤが天使から受けた受胎告知も聖靈による働きでした。「御使が答えて言った、『聖靈があなたに臨み、いと高き者の力があなたをおおうでしょう。それゆえに、生れ出る子は聖なるものであり、神の子と、となえられるでしょう』」(ルカ 1:35)。このように、人類の歴史の中で多くの働きをなされました。しかし、五旬節が大事なのは、キリ



ストの贖いと復活の実として与えられた祝福だったからです。神の救いの摂理が聖靈降臨により完結したからなのです。まさしく、教会時代の幕開けであり、個人的な事件ではなく、共同体的な事件でした。マルコの屋根裏部屋で 120 人の信徒が熱心に祈っていたときとあります。教会誕生の瞬間だったのです。「なわち、ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなたがたは間もなく聖靈によって、バプテスマを授けられるであろう」(使徒行伝 1:5)。教会は単なる宗教的集まりではなく、聖靈を受けた人の共同体なのです。聖靈のバプテスマなしに教会は存在し得ず、また、聖靈充满でない信徒も存在し得ないです。

本文は、その絶対的な聖靈のバプテスマに関する証言です。しかし、ここではっきりしておきたいことは、聖靈のバプテスマと聖靈充满は、異なるものだということです。本文を冷静に読めば、主観的感想であり、断言的内容ではないことがわかります。『突然の風邪のようで、舌のような、炎のような』とあります。イエス様がヨルダン川で洗礼を受けられたときは、「イエスはバプテスマを受けるとすぐ、水から上がられた。すると、見よ、天が開け、神の御靈がはとのように自分の上に下ってくるのを、ごらんになった」(マタイ 3:16) とあります。同じ聖靈でもそれぞれの感じ方、体験には相違があります。つまり、どのように聖靈のバ

バプテスマを受けたかも大切ですが、その後、どのように聖靈充满になったかが重要なことです。『聖靈充满のようになった』とは書かれていません。明確に『聖靈充满になって』とあります。聖靈を受けて、どのように変わったかが大事だというのです。

嵐のような体験、溶鉱炉のような熱い体験、静寂の中での体験、様々なバプテスマの形態がありますが、共通点は、その後、聖靈充满な暮らしをしていることです。バプテスマは一度限り、後は聖靈充满を求めるのです。結婚と愛について考えてみてください。結婚式は一度切りですが、夫婦の愛は一度限りのイベントではありません。同様に、聖靈によるバプテスマは一度切りでも、聖靈との交わりは持続的かつ必須的な要素なのです。そうでなければ、クリスチヤンの聖靈は枯渇します。結婚式には和式、洋式、韓国式等があり、衣裳は新郎新婦の選択に依ります。しかし、結婚生活は日常の連続です。聖靈のバプテスマの形態は様々でも、聖靈充满は毎日の交わりと、聖靈による導きによりなされます。聖靈のバプテスマを年月日と場所を正確に覚えている人もいれば、いつ受けたか分らない人もいます。しかし、イエスを信じているということは、間違いなく聖靈のバプテスマを受けたのです。だからこそ、常に聖靈充满を求めるべきなのです。夫婦が同居するのが結婚生活なら、聖靈様と同居するのが聖靈充满です。イエス様は道であり、真理であり、命です。イエス様は復活された後、弟子たちに息を吐きながら『聖靈を受けよ』と宣言されました。呼吸は、生命です。聖靈充满とは、イエス・キリストの生命の内で生きること、真理の内に生きること、御言葉の内に生きることなのです。イエス様と共に歩むことが聖靈充满であり、喜び、平安、希望、愛の実を結ぶ唯一なる道なのです。御言葉で呼吸し、イエス様と一つになることができますように。†

＊大きな絵でこの世を理解する

ユダヤ人大虐殺と ナチスドイツと教皇

| キム・ジョンチョル | www.bradtv.net



キム・ジョンチョル監督は映画「回復」「許し」「第三聖戦」「ルターの二つの顔」等を作ったキリスト教ドキュメンタリー映画の監督で、イスラエル中東の専門家です。特に『回復』はモナコ国際映画祭でドキュメンタリー部門のグランプリを受賞し、『ルターの二つの顔』はLAマインドフィールド映画祭でドキュメンタリー部門のプラチナ賞を受賞しました。現在はイスラエル宣教の専門放送「ブラッドTV」を7年間運営しています。

複雑で入り混じった歴史の流れを「神の視点」で正しく解釈し、お伝えすることで、読者の皆様の一助となればという思いです。至らぬ点ばかりですが、ご声援をいただき、ありがとうございます。主に「終わりの時」に関連するテーマを扱おうと思っていますが、今回は歴史的に大きな意味を持つ出来事について、クリスチヤンの観点から「ビッグピクチャーで世界を読む」ことをしたいと思います。(編集者)

スティーブン・スピルバーグ監督の映画「シンドラーのリスト」

映画「シンドラーのリスト」は、1994年に公開され、2019年にも再公開されるなど、よく知られているスティーブン・スピルバーグ監督の作品です。上映時間が3時間16分という大作ですので、映画館で鑑賞しようとは気軽に思えないかもしれません、本当に時間が経つのを忘れるほど、息もつかせぬ胸躍る作品



です。

この映画は私たちを二度驚かせます。最初は、人間がこれほどまでに残酷になれるのかというその残酷なシーンに驚きます。後半では、狂気と恐怖が支配する厳しい状況でも、一人の勇気と献身が多くの命を救うことができるという奇跡に驚かされます。

始めは重い雰囲気が展開し、後半に進むほど目を離せなくなります。そして、この映画が米国アカデミー賞で作品賞と監督賞を含む計7部門を受賞し、また、歴代最高の映画に数えられていることが納得できるでしょう。第二次世界大戦中（1939～1945）にユダヤ人大虐殺が行われていたとき、ドイツ人実業家オスカー・シンドラー（Oskar Schindler）はユダヤ人を工場で雇用し、戦時下を利用して大金を儲けます。しかし、シンドラーのお金稼ぐ喜びは長く続きませんでした。一日のうちに家や財産を理由もなく奪われ、収容所に連行されていく人々、老若男女を問わず容赦なく殺される人々を毎日目にするのは地獄だったのです。

彼は危険を冒して、工場で働いていたユダヤ人千人以上を強制収容所から救い出します。命の危機を伴う大変な仕事でした。スピルバーグ監督が描いた実在の人物シンドラーの勇気ある行動は、世界中の人たちの胸をいっぱいにし、深い感動を与えました。

ユダヤ人大虐殺とその責任者

問題はこれです。冷徹で極めて利己的であったドイツ人シンドラーさえ良心の痛みを感じ、自分の富と命をかけて勇気ある行動をしました。なぜ、教皇は史上最悪の犯罪であるホロコースト（Holocaust）を知っていたのに、見過ごしたのでしょうか？

これは信じられない「歴史的アイロニー（irony）」であると同時に、私たちが必ず記憶しておかなければならない事実（Fact）です。なぜ、イエス・キリストの「愛の戒め」を語る教皇が、長期間続いた恐ろしい犯罪行為に良心の痛みを感じなかつたのでしょうか？ 口にできない何かの事情があったのでしょうか？



アドルフ・ヒトラー
(1889～1945)
第2次世界大戦を起し、ユダヤ人600万人を虐殺した独裁者

第二次世界大戦中、ヒトラーのナチスドイツはなんと600万人のユダヤ人を虐殺するホロコーストを実行しました。確かに一次的な責任はヒトラーとナチスドイツにあります。しかし、ヨーロッパ全域で起きたこの「民族浄化」の責任はナチスドイツだけが問われるものなのでしょうか？

そうではありません。本人が認識しているかどうかは別として、この犯罪に直接的、あるいは間接的に関与した人は大勢います。その中でも注目すべき人物がまさに教皇です。少なくともカトリック教会の首長である教皇には一定の責任があったということです。

ナチス総統アドルフ・ヒトラー、権力序列ナンバー2でありながらユダヤ人大虐殺の最高実行責任者であったハインリヒ・ヒムラー、公共啓発宣伝長官としてナチスを宣伝して美化したパウル・ヨーゼフ・ゲッベルス、ヒトラーの首席補佐官としてすべての面倒を引き受けていたマルティン・ボルマンなど、ナチス首脳部の大半がカトリック信者だったからではありません。

続く教皇ピウス12世の沈黙

第二次世界大戦当時、カトリック教会の首長は、戦争が勃発する4ヶ月前に選出された第260代ローマ教皇ピウス12世でした（在位期間：1939～1958）。

ユダヤ人を虐殺する狂風が吹き荒れる最中、彼は一度も正式に批判することなく沈黙を貫いたと、歴史の専門家は証言しています。周囲の多くの人々がナチスドイツの野蛮な行為を批判する声明を出してほしいと繰り返し要請しましたが、教皇ピウス12世は最後まで沈黙したままでした。

さらに1943年10月、法王庁があるローマにて、ナチスがユダヤ人を強制的に家畜輸送用トラックに乗せて収容所に連れて行きましたが、教皇は見えないふり聞こえないふりをし、何もしませんでした。バチカンのガラス越しに連行されて行くユダヤ人の悲鳴を確かに聞いたはずなのに、教皇はその哀れな人々を気に留めなかつたのです。

「教皇庁の金と権力の歴史」という本では、ローマでユダヤ人が連行された翌日、教皇はヒトラー政権の外相ヨアヒム・フォン・リッベントロップに感謝の手紙を送ったといいます。戦争終盤だった1944年の夏、戦況が悪化し始めたドイツがイタリアで完全に敗退した時も、ハンガリーではまだ50万人のユダヤ人が強制収容所のガス室に送られていました。それでも教皇はその野蛮な犯罪に対して公的に言及することを拒否しました。

教皇の沈黙をどう評価するか

カトリックの修道女であったエディット・シュタインは、ドイツに住む多くのユダヤ人がナチスによって逮捕され、その場で処刑されたり、収容所に連行されたりした場面を目撃し、教皇に手紙を送っています。

「今、ドイツで毎日のように起きている残酷非道な行為は、自らをクリスチャンと自負する人々によって行われています。このようなことは、十字架上でも迫害する者のために祈られた主に反するものではないでしょうか。教皇がこれを防いでくださらなければなりません」

この手紙を読んだピウス12世は、何の反応も示さなかったといいます。ただ、私たちが教皇に対して、独裁者ヒトラーとナチスドイツに対抗して戦わなかった、侵略戦争に対して反対の声を上げなかつたと非難はできないと思います。当時のドイツ帝国の狂気は誰であつても簡単には対抗できない、悪魔のようなものだったからです。

しかし、「ユダヤ人大虐殺」という恐ろしい蛮行に対して道徳的に非難する声明すら発表していないことは到底許されないとです。カトリック教会の首長である教皇がヒトラーに宗教的压力をかけ、寛容を要求する最低限の措置を講じていたならば、どれほど狂気に満ちた独裁者であつても、ある程度の反応をしたはずです。象徴性のある教皇と友好的な関係を持つために、また、民心に大きな影響を与えるカトリック勢力を政治的に取り込むために、ある一定の自制を示した可能性があったからです。そうしていれば、大虐殺の悲劇を少しでも防ぐことができたはずだと考えると、とても残念なことです。

悪化する教皇庁の財政状態

それではなぜ、神の代理人と呼ばれる教皇は何もしなかつたのでしょうか？ 驚くべきことに、あまりにも世俗的であった教皇庁の財政状態と黒歴史がその背景にあります。

まず、第二次世界大戦前の教皇庁の財政状態がどのようなものかを調べる必要があります。ピウス11世が即位した1922年（在



第260代教皇ピウス12世（1939～1958）



バチカン市国国旗

位期間：1922～1939）頃、教皇庁の財政状態は深刻で、ほぼ破産状況でした。聖職者を除いて、最低限の人員だけが残っていた教皇庁の建物は崩れても修繕できず、冬には暖房もなく司祭たちは震えるだけだったといいます。世界史を少しでも勉強した人なら、世界最高の権力と財産を保有した教皇庁にお金がなかったという事実は納得できないと思います。しかし、よくよく調べてみると、当時の教皇庁がお金に悩まされていた理由は多々あります。

まず1517年のマルティン・ルターの宗教改革以降、カトリック教会の影響力は徐々に縮小し始めていました。プロテstantが急速に成長することにより、カトリック教会の献金収入は激減しました。17世紀後半に起こったフランス革命も教皇庁の財政に打撃を与えました。フランス革命直後、フランスにあった教皇庁の資産が国有化されたのです。まもなくして、フランスを含む欧州のカトリック諸国が送金していた資金も中断されました。教皇庁の財政状態はますます悪化していったのです。†

（次号に続く）



自己否定、 真のリーダーになる出発点



自己否定は弟子道の核心

長老派の創始者ジャン・カルヴァンの不朽の名作『キリスト教綱要』は、宗教改革運動に大きな思想的影響を及ぼしました。プ

ロテスタンントの改革主義の伝統に従う長老派の神学は、今もその影響を強く受けています。彼は全4巻となる『キリスト教綱要』の中で、自分を捨てて (Selfdenial) 十字架を負う生活 (Bearing the Cross) は、クリスチヤンの信仰生活で最も重要であると力強く語っています。自己否定は弟子道の核心となるのです。

それから群衆を弟子たちと一緒に呼び寄せて、彼らに言われた、「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。」(マルコ 8:34)

すなわち、すべての人は罪を犯したため、神の栄光を受けられなくなつておる (ローマ 3:23)。

罪の核心は、人がその本分を忘れて神のようになろうとする高慢です。高慢の本質は、自分自身が神の地位に座って、宇宙の中心として生きようとすることです。神の栄光のために創造された人間 (イザヤ 43:7) が、神の御座に座ろうとしたため、人類の不幸が始まったのです。堕落した人間は創造の秩序を破り、自分のために偶像を作り、その偶像に仕えてきました。

罪に捕われた人間

罪に捕われた人間は誰もが、自分の王国を立てようと一生懶けて努力し、やがて世を去ります。多くの人々が自分自身という王国を立てて、その王国に誰も足を踏み入れさせません。自分自身の喜びと満足を求めるものの、ほとんどが深い傷と苦しみの中にこの世を生きて、最後の瞬間を迎えます。

罪に捕われた人間は、自分が自分の人生の主人であり、自分の王国における唯一の支配者と考えて、誰も許可なく自分の領域に侵入することを許しません。同時に、自分については限りなく寛

大で、自分に対するどのような非難も容認しません。偉大なる使徒パウロも人間の中に内在している罪の問題に葛藤しました。ローマ人への手紙7章は彼の煩惱の告白です。

わたしは自分のしていることが、わからない。なぜなら、わたしは自分の欲する事は行わず、かえって自分の憎む事をしているからである。(ローマ7:15)

そこで、この事をしているのは、もはやわたしではなく、わたしの内に宿っている罪である。わたしの内に、すなわち、わたしの肉の内には、善なるものが宿っていないことを、わたしは知っている。なぜなら、善をしようとする意志は、自分にあるが、それをする力がないからである。(ローマ7:17～18)

自己否定はこの葛藤を解決できる唯一の答えです。

自己否定の手本を見せられたイエス様

イエス様が自分を従う群れと弟子たちに、わたしについてたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさいと言われました。

それから群衆を弟子たちと一緒に呼び寄せて、彼らに言われた、「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。(マルコ8:34)。

「自分を捨てる」は、キリストの弟子のスタートであり、そのプロセスであり、すべてです。イエス様ご自身が自ら自己否定の見本を示されました。イエス様は神の子でありながらも、肉体をまとめてこの地に来られ、徹底的に自己を否定し、犠牲を払われました。今日の私たちに必要なのは、徹底した自己否定をとおして、キリストの弟子の道を歩みながら、私たちに向けられた神の御心を伝える謙遜な指導者です。†

＊私の人生、私の証

ユン・チヨン 牧師／シドニーアノインティング(Anointing)教会、キングダムアライアンス(Kingdom Alliance)の働き



「神様の愛だけが、
神の御国の大鍵である」

中国での働きは素晴らしい御業の連続でした。中国上海の家庭教会に通っている女性がいました。その女性は教師でしたが、プライドが高く、また兄は画家、義理の姉は音大教授でした。この姉妹は離婚後に神様を恨み始めました。さらに神様に敵対するようになり、ついにお寺に通って偶像崇拜をするまでに至りました。

何よりもその女性はまともな生活ができなくなりました。さまざまな人が祈り、私の教会の副牧師が祈っても変わらず、私が直接姉妹の所に行きました。私が祈ると発作が起き、家ではどうしようもなくなり、教会に連れて祈りました。悪霊を追い払った後でも発作が繰り返し起ったため、夜明けまで祈る日々が続きました。そのような祈りが毎日続き、祈りの時間がますます増えました。後でわかったことですが、その女性自身が悪霊を望んでいた

ため、悪霊が追い出されてもまた入ってくることが繰り返されました。私は「神様、この人をあわれんで、悪霊を追い払ってください」と熱心に祈りました。妹のことが心配になった兄とその友人たちが参加したある日のことでした。彼らはイエスを信じていなかったのですが、自分の妹のために夜明けまで祈る教会の人々を見て感動し、ついにイエスを受け入れる御業が起こりました。

「どうして外国の韓国人が中国人のために、ここまで切に祈ることができるのか？」と尋ねられて、「神様の愛だけが可能です」と答えました。彼らは「これが神の愛なら、私たちもイエスを信じる」と告白しました。すべての魂が救われることが、主の御心なのです。

■悪霊が追い出されて、魂の救霊が起きる

中国の全域を回りながら、このような信じられないいやしの御業が起こると、噂が広がり、他の町の人も訪れます。そうなると、公安がすぐに調べに来るため、私たちは他の場所へ逃げないといけませんでした。

私たちを守るために、家庭教会の指導者たちは、田んぼの真ん中にある肥料置き場や豚の厩舎で集会をしました。なぜならば、その場所は東西南北に道があるため、公安に見つかったときでも逃げやすいからです。奇跡は各地で起き、悪霊の追い出しは日常であり、病気のいやしの御業は続きました。

あるお金持ちの漢民族の女性は、6年間も原因不明の病気で苦しんでいました。治療のために持っている家を売るなどすべての財産を使い切りましたが、治る様子はありませんでした。しかし、この姉妹のために祈るとき、神様が悪霊を追い払われ、夫は悔い改め、周りの人々は回復される御業が起こりました。聖霊様が働いたのです。神様の愛によって神の御国が成就する働きでし

た。中国での御業は、オーストラリアの刑務所での経験と比べたら、そのスケールが信じられないほど大きいものでした。御言葉を伝えながら、神様の恵みで愛し、魂を救うことだけに集中しました。

しかし、人々が奇跡だけを求めて集まつてくるときは、本当に大変で疲れました。あまりにも多くの人々から祈りを求められ、イライラすることもありました。ところが、この経験をとおして、私は成長してきました。マタイによる福音書4章と9章はほぼ同じ内容ですが、微妙に違う箇所があります。イエス様の働きは時間が経てば経つほど、より深く成熟していきました。3年間の公生涯を終えて、最後に十字架につけられたとき、私たちへの主の愛はピークに達し、ご自身の命までささげられました。主は使命により死なれたのではなく、私たちへの愛ゆえに死なれました。御言葉を黙想していると、「息子よ、私は使命ではなく、あなたを愛しているから、あなたのために死んだのだ」と主が語られるのを感じました。

私が公安に逮捕されることを恐れない理由がいくつかあります。もうすでにオーストラリアの刑務所で神様から救われた経験を何回もして、使命を果たすまでは神様が守ってくださるという信仰があったからです。実は一時、主の働きに疲れ、家族も苦しんでいたので、宣教を止めたいと考えていたことがありました。

しかし、公安に捕まつて追放されたら、宣教師としての面目が立ちますが、自分で宣教を諦めてシドニーに帰ったとしたら、とても恥ずかしいことです。正直、公安に捕まつて追放されてもいいという大胆な気持ちもありました。大変で疲れているときは「どうか私を捕まえろ」と思ったりもしました。しかし、監視のため集会に来た公安がむしろ恵みを受けて、イエス様を信じる御業が起きました。

■夜を明かして子供のために祈る

ある日、公安が押しかけてきました。家庭教会の指導者と私がお互いに先に逃げるように配慮しているうちに捕まってしまったのです。聴取を受けていると、四川省大地震により死者数がどんどん増えているというニュースが放送されました。

私は話題を変えて公安に質問しました。「私は中国を愛している。そして、警察を尊敬している。ところが、あなたは老後の準備をしているのか」。彼は老後については完璧な準備をしていると、自慢し始めました。私は相づちを打ちながら、「ところで、死後の準備はできているのか？」と質問しました。

彼の顔は急に深刻な表情になりました。私はこのタイミングを逃さずに、「今、四川省での地震により数万人が突然死を迎えた。だが、死んだ人のなかで死の準備をしていた人はどのぐらいであろうか。老後の備えはあったとしても、この世での生活はやがて終わる。しかし、死後というのは永遠の世界だ。その永遠のために準備する人はどれだけ賢い人なのか」と、話しました。彼は私が伝える福音に耳を傾け始めました。そして、その日、彼はイエス様を受け入れました。聖霊様が彼の心に触れてくださったのです。

このような素晴らしい主の御業が続く一方、私は家族にいつも申し訳ない気持ちでいっぱいでした。中国全土を回っているため、子供たちのためには何もしてあげられませんでした。時間を作ることもできませんでした。そのため、私は一つの誓いを立てました。それは子供のために熱心に祈ることです。週末に帰宅したとき子供を抱いて祈ること、それが唯一子供たちとの深い交わりの時間でした。

神様は子供の責任を負ってくださるという信仰を持って、金曜徹夜では子供の祈りだけを切にささげました。ありがたいこと



いかに場所が狭くみすぼらしくても中国の渴いた魂は、神様を慕い求め集まってきた。



中国北京にある私どもの家庭教会で洗礼式を祝う場

に、妻は大変な時期を主の恵みによりよく耐えてくれました。妻は英語の家庭教師をしながら生活費を稼いでいましたが、生真面目な妻は宣教費の1ウォンも生活費として使ったことがありませんでした。家族皆がパーカー1つを4~5年も着続けていましたので、妻と子供たちはどんなに辛かったでしょう。

ところが、神様は本当に素晴らしい方です。私の子供は二人とも成績優秀で、オーストラリアでも有名な大学に入りました。主のために殉教すると告白した娘は、まず死ぬ覚悟で勉強をしました。オーストラリア全体で3位以内の成績を収めて、UNSW大学に入学し、法学と数理学を勉強しています。何より嬉しいのは、子供たちが主をとても愛しているため、主のためだけに生き、殉教も辞さないと告白する神の子供となったことです。私の涙の祈りを聞かれた神様に感謝するだけです。

■父の心を盗んだ者

今はコロナにより宣教の働きが自由にできず、出入国するのも難しくなっている状況ですが、私は今も宣教師として多くのことを学んでいます。宣教については、ヨハネによる福音書3章16節にすべて書かれています。神様が宣教の主体であり、宣教の対象は世の中であり、神様の宣教の動機はまさに「愛」です。この

ここに私はいつも感動しています。オーストラリアでの刑務所経験と中国での働きをとおして気づいたことがあります。それは神様の子供はみな宣教師であるということです。

宣教師には二種類います。神の子の靈性を持った者と僕の靈性を持った者です。私たちは、神の子の靈性を持った宣教師になることを望まなければなりません。その靈性を持った者は一致し、常に宣教をし、父の心をよく知り、その心を盗んだ者です。父は子供が負担を感じないように胸の内をあまり明らかにしません。そのため、私たちは時々父の心を盗まなければなりません。父の心をよく知っているため、福音を伝えなくてはならなくなります。子がすべてのことをやり尽くすと、父から資産を受け継ぎます。資産がないとしても、父のことが無条件に好きなため、父の道を歩むようになります。私も父がとても好きなので、その心を盗むようにいつも努力しています。

伝道は命をかける仕事です。水に溺れている人を無視することはありません。私たちも水に溺っていましたが、父の心を知る者、その心を盗んだ者から助けられました。死から命の道に導くには「一致」という神様の戦略が必要です。一致は複数のものが結び合って一つになることです。例えば、指一本では壁を開けることができませんが、指が集まって拳になると、開けることができます。イスラエルの民がエジプトから出られなかった理由は、12部族が一致せずにそれぞれ動いていたからです。神様はモーセを立てられ、彼によりイスラエルの民は一つとなり、数百年間の奴隸生活をしていたエジプトを脱出しました。

今は一致が必要です。韓国すべての教会がつながり、一致して立ち上がるとき、神様は全世界に素晴らしい御業を起こされるでしょう。私はこの希望を抱いて、主の働きのために、毎日主の前に進みます。†

* レビ記ライフ | カン・デウィ 牧師／ハンセサラム教会担任牧師

「私たちを記念するため、 このように行いなさい」 —— 素祭



燔祭と素祭と酬恩祭は、それぞれ分離した「いけにえ」ではなく、互いにつながっています。この三つのいけにえにより、完全な礼拝が成立します。燔祭が『死』のいけにえならば、素祭は『人生』のいけにえです。私たちが十字架に自分を釘付ける「死のいけにえ」を捧げるのは、単に死ぬためではありません。新しいキリストの人生を生きるために死ぬのです。燔祭が決断を献げるいけにえであるならば、素祭は日常を献げる礼拝です。決断は生き方によって完成します。素祭は飛び散ってなくなる日常の粉々を主に献げる礼拝です。

細かい粉——素祭、最上の小麦粉——と訳される「ソーレット

(皮をむく)」には、「皮をむく」という意味があります。固くざらざらした皮（虚偽）が剥がれ、柔らかい麦（本質）が現れるのが素祭です。皮をむく過程は、試練による訓練を表しています。

「シモン、シモン、見よ、サタンはあなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って許された。しかし、わたしはあなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈った。それで、あなたが立ち直ったときには、兄弟たちを力づけてやりなさい」（ルカ 22:31～32）

シモン・ペテロは三度もイエス様を否認しましたが、その失敗は自分の固い皮をむく訓練になりました。試練は勝利だけでなく、失敗をとおしても乗り越えることができます。ペテロとパウロ、ダビデとサムソンは試練に勝てませんでした。しかし、試練をとおして、その負債がある者として、低き心を持った生涯を歩むことができました。一生をうまくやり過ごし、失敗を知らない人は、真に主により頼むことができません。自身の弱い内面に直面し、それを克服してこそ、真の勝利者になります。

「これをアロンの子なる祭司たちのもとに携えて行かなければならぬ。祭司はその麦粉とその油の一握りを乳香の全部と共に取り、これを記念の分として、祭壇の上で焼かなければならぬ。これは火祭であつて、主にささげる香ばしいかおりである」（レビ記 2:2）

素祭は「記念」の祭儀であり、最上の小麦粉を油と乳香と共に祭壇で焼く、いけにえの一つです。なぜ、これが「記念」になるのでしょうか。記念の辞書的な意味は、「ある意味深いことや偉

大な人物などをいつまでも忘れずに心に留めておくこと」です。しかし、聖書における「記念（アズカラ）」には、格別な意味があります。この単語は「刻む（ジャカル）」という語源に由来した言葉です。聖書で記憶するという行為には、単に過去の事を回想することだけではなく、その対象と自分をつなげるとも含まれています。

この言葉と同じ意味を持つ韓国語があり、それは「恋しさ」です。心理学者キム・ジョンウン博士は、「恋しさ」と「絵」と「文」は「描く」という動詞から作られたと述べています。その対象を活字で表現すれば「文」になり、線や色で表現すれば「絵」になり、心の中で思い描けば「恋しさ」になるというのです。私たちがイエスの「記念」になるとは、キリストを思い描くことです。私の人生にイエス様を描くいけにえが素祭です。素祭は恋しさです。

「またパンを取り、感謝してこれをさき、弟子たちに与えて言われた、『これは、あなたがたのために与えるわたしのからだである。わたしを記念するため、このように行いなさい。』」（ルカ 22:19）

素祭はヘブル語で「ミンハ」と呼びますが、これはある地域の王が自国より大きな皇帝に献げる貢物を意味します。自分の王が誰なのかを告白するいけにえが、すなわち素祭です。長時間苦労して得た自分の収穫物の主権は「神にある」と告白する祭儀なのです。収穫物は自分の努力と投資の結果ではなく、真なる王の助けと恵み、摂理によるものだと告白します。自分は何のために生きてきたのかという告白が、このいけにえの供え

物には含まれています。

燔祭が価値を再確立する礼拝であるならば、素祭は成功を再規定する礼拝です。ほとんどの人は、自身の成功は自分の力だけによるものと考えます。単に運が良かったからという場合もあります。しかし、成功の実はすべて主の恵みなのです。礼拝は神様に感謝の食卓を備えることです。創世記18章に、アブラハムが自分の家を訪問した主の使者たちに「パンを少し」もてなしたいと言い、『最上の小麦粉三セア』をこねてパンを作る話が出てきます。「三セア」は、約22リットルにもなります。

サムエル上25章において、ダビデの軍隊である私兵4百人ほどが食べる穀物が五セアなので、有り余るほどの料理を準備したのです。イエス様も荒野で空腹な人々を食べさせたとき、十二かごが残るほどに与えられました。私たちが主の御心で満たされて充満になるように、主に対する私たちの心が満たされるいにえが素祭なのです。

「この教会はキリストのからだであって、すべてのものを、すべてのもののうちに満たしているかたが、満ちみちているものに、ほかならない」（エペソ1:23）

足し算、引き算、掛ける算

油を注いだ細かい粉を練ってパンを作ります。素祭は油注ぎの礼拝ですが、粉のように飛び散った人たちの連合を意味します。聖霊の油注ぎは、以前は敵対していた兄弟との和解を成立させます。

「見よ、兄弟が和合して共におるのはいかに麗しく楽しいことであろう。それはこうべに注がれた尊い油がひげに流れ、ア

ロンのひげに流れ、その衣のえりにまで流れくだるようだ」（詩篇133:1～2）

マルコの屋根裏部屋で聖霊の油注ぎを受けた聖徒たちは、以前は自分と全く関係のないものだと思っていた他国の人々の言語で話しました。これが聖霊の油注ぎです。私の言葉ではなく、相手の言葉で考えて生きるようになる、これがすなわち、油注ぎの人生です。

そして、素祭には「乳香」と「塩」を入れるように言われますが（レビ記2:13、15）、乳香は聖徒たちの祈りを象徴しています（黙示録8:3～4）。乳香は「白くなる（レヴォーナー）」というヘブル語に由来した言葉です。「わたしの思いではなく、御心が成るようにしてください」という告白は、祈りであり、香りなのです。

塩は自身を溶かして味を出します。塩を意味する「מלח（メラハ）」というヘブル語の本来の意味は「溶けやすい」です。

「あなたがたは、地の塩である。もし塩のききめがなくなったら、何によってその味が取りもどされようか。もはや、なんの役にも立たず、ただ外に捨てられて、人々にふみつけられるだけである」（マタイ5:13）

塩が味を失うのは塩分が抜けたからではなく、もはや自身が溶けてなくなったからです。自分の人生を絶えず注ぎ出して、この世に神の約束が成し遂げられるようにする人生が素祭です（マルコ9:50）。

また、素祭には入れてはいけないものがあります。それは『パンの種』と『蜜』です。パンの種はパンを膨らませるもので、人々に良く見せるための行い、偽善を表しています。

「あなたがたが誇っているのは、よろしくない。あなたがたは、少しのパン種が粉のかたまり全体をふくらませることを、知らないのか」（第一コリント 5:6）

また、パン種による発酵は腐敗や死を意味しています。偽善や虚勢、虚しい関係に縛られる人生から抜け出しなさいという意味です。パン種が他人に対する偽善と虚勢を意味するならば、蜜は欺瞞な人生を意味します。現代人の生きる目的と期待は幸福な人生を送ることです。ところが、何でも買えて、好きなものを食べられることが、あたかも幸福であるかのように錯覚して生きてています。しかし、私たちは主が与えてくださる苦難のパンも感謝して食べなければなりません。

「種を入れたパンをそれと共に食べてはならない。七日のあいだ、種入れぬパンすなわち悩みのパンを、それと共に食べなければならない。あなたがエジプトの国から出るとき、急いで出たからである。こうして世に生きながらえる日の間、エジプトの国から出てきた日を常に覚えなければならない」（申命記 16:3）

主イエスの人生を生きるとは、私たちが苦難のパンを食べることです。それは「ただ苦労しましょう」ということではありません。苦難をとおして、神の御国がこの地において回復され、キリスト・イエスの再臨を準備するためです。教会は苦難を恐れない生き方を回復しなければなりません。多くの教会と聖徒たちは、これによって主の再臨を待ち望む者としてふさわしく生きることができます。 十字架の主イエスを自分の人生に描く「素祭」へと進みましょう。†

✿ 狹き門、狭き道

カン・サン 牧師／十字架教会＜御言葉の前に立つあなたに＞著者

神様、 私は何をしたらいいでしょうか？



神学校4年生の一学期に、新約学を教える少し不思議な教授の授業に出席したことが思い出されます。最初の授業でその教授は「Aの評価を与えた授業は今まで一度もなく、今回の講義でもAは与えないつもりだ」と、自慢げに警告のようなことを言ったのです。問題は、私が次学期で奨学金をもらうには、その科目でAを必ず取る必要があったことでした。そこで私は勇気を出して、その教授に「万が一でも、Aを取るにはどうすればよいのですか」と尋ねました。

教授はやや不快な顔で私をずっと見つめて、「Aをもらいたい場合は、ヨハネの黙示録の全章をギリシャ語で翻訳し、原文と照らし合わせて持ってくるならば、少しは考えてみる」と言いました。

た。すると、一緒に授業を受けていた友達が「ありえない！」と叫びました。それは、銃に初めて触れる新兵に3ヶ月間で狙撃の名手になりなさいというような、全くでたらめな話でした。不可能だからやめなさいという意味だったのです。しかし、病気の弟と収入がほとんどない母と一緒に暮らす私には、どんなに小さな可能性であっても挑戦しないわけにはいきませんでした。そこで、私はその日から毎日2時間ギリシャ語聖書を開き、ヨハネの默示録を翻訳し始めました。

後でわかったことでしたが、ギリシャ語の聖書の中でも、ヨハネの默示録は極めて難解な文で構成されており、文法も不規則かつ変形されたものが多い書簡でした。もちろん、語学力は皆無でしたし、利用可能なツールもほとんどありませんでした。

ネストレ・アーラントのギリシャ語聖書26版とギリシャ語の辞書一つだけでは、どんなに頑張っても1日に1、2節を翻訳できればいいほうでした。また、そのように苦労した翻訳が正しいかどうかを確認する方法もありませんでした。

約束を実践した結果

しかし、3ヶ月間の1日も欠かさず、ヨハネの默示録22章404節を翻訳し続けました。途中で投げ出したい日がたくさんありましたし、あまりにも辛くて涙を流した日もありました。

期末試験の2週間前に、私はその成果物を教授に提出しました。教授は驚いて私が翻訳した文章をいくつか読みました。精度の低い翻訳が多かったと思いますが、大変な課題を達成したという理由だけで、教授はその学期にAではなく、A+を私にってくれたのです。その教授の生涯で初めての出来事でした。

成績表をもらった日、私にはこのような感動がありました。人

の約束でも実践すれば驚くべき結果があるのに、ましてや神様の約束である御言葉を実践すれば、どれほど素晴らしい結果となるであろうかというものでした。それ以降、私はこれまでの30年間、聖書にある神様の約束を実践しようと、命をかけ最善を尽くし今まで生きてきました。恨みや不平を言いたくなるような貧しく辛い人生でしたが、計数機で数えながら、1日に数百回の感謝をしたことがあります。お金も能力もなかったので、毎日5時間祈りを捧げたこともあります。

主のしもべは御言葉のしもべにならなければならぬという示しを受け、夜明けに起きて毎日7時間聖書を読んだこともあります。また、福音を私の中にとどまらせるのではなく、多くの人々へ流れていく泉にしなければならないと思い、毎日路傍で福音を宣べ伝えました。財政的に厳しくても最善を尽くして献金を捧げ、施しを受けるたびに聖徒や隣人と分け合ったこともあります。

もちろん、人は行いによって救われるのではなく、努力と労苦が神の御業を完成させるわけでもありません。しかし、私が理解したとおり、あるいは私が感情的に納得したようにではなく、従順し実践したとおりに、神様は報いてくださいました。種に命があるという知識と、その種は立派な木に育つという感動だけでは、何の変化も起こりません。どんなに辛い日々を過ごしているとしても、一粒の種を蒔く者には喜びが必ず来るのです。

牧師として胸が痛むことは、教理的にいかに多くの知識を持っていて、感情的にどんなに大きな恵みを受けたとしても、実際の生活に御言葉を適用し、実践する人がほとんどないという現実です。多くの礼拝を捧げても、実践がなければ、生活は少しも変わらないのです。

信仰の行い

大勢の人々は、今週の説教の意味がわからず、御言葉を一つも適用することができません。なぜなら、知っていることを生きることと錯覚し、感じることを生活することと錯覚しているからです。祈らなければいけない時に、祈りの本を読んでいたら、何の意味があるでしょうか。愛を分かち合わないといけない時に、愛に関する映画を繰り返し見たからといって、何の役に立つでしょうか。なぜ、世界の人々がクリスチヤンを批判しているのかわかりますか？ 知識がないからでも、感動がないからでもありません。

素晴らしい知識と感動を持っていながら、人生や生活に何一つ変化が起きていないからです。何も実践しないで結果が出ることはありません。知識は人を高慢にさせるだけであり、感情は人を欺くだけです。実践の中で生き残ったものだけが実を結びます。さらにいうなら、理解が少し足らず、感情的な刺激が少なくとも、従順して実践すると、理解できなかつたことが理解できるようになります。自分の心にそぐわないことにも感謝するという驚くべき逆転が起こるのです。

では、なぜ祈るべきなのでしょうか。祈りとは、私たちが神様からもっと大きな恵みや感動をもらおうとすることではなく、すでに受けた恵みや感動を生活の中に適用していく力を願うことです。

5月は家族の月です。しかし、血の繋がった者だけが家族なのではなく、靈的な家族が眞の家族です。その眞の家族とは、互いに家族であることを知識として認知し、感情的に共感していることではありません。互いにもてなし、仕え合うのが眞の家族です。

担任牧師から教会学校の学生に至るまで、コロナ禍で苦しんでいる教役者とその家族のために、それぞれが何をすべきか祈ってみましょう。

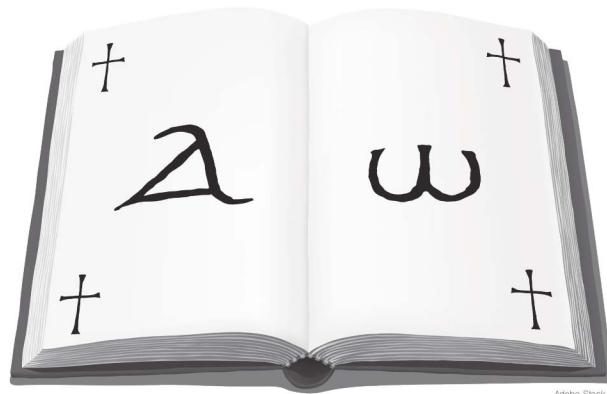
自分の人生が変わることを本当に願っていますか。私は確実な方法を知っています。今すぐ通帳を出して、主の前にこのように祈ってみてください。

「主よ、私は何をしたらいいでしょうか？」

百回でも千回でも、神様に繰り返し叫んでみてください。そうすると、思い浮かぶ人物とその状況、感動が必ずあるはずです。そして、神様から受けた感動と挑戦を、自分の手足、時間や財産などを使って実践してみてください。周囲の人々があなたを介して神様に出会うことになります。

聖書は明確に語っています。眞の信仰は行いと共に働き、その行いによって信仰が全うされます（ヤコブの手紙 2:22）。新たに始まる5月は、あなたをとおして神が栄光をお受けになる、A+の人生となりますよう祝福します。†

あなたの名は勝利を得る者



BC536年、三週間の断食をしながら祈っていたダニエルは、チグリス川の畔で「主の使者」に会い、終わりの時に関する啓示を受けました。

「大いに愛せられる人ダニエルよ、わたしがあなたに告げる言葉に心を留め、立ちあがりなさい」（ダニエル 10:11）

主の使者は「ペルシャ時代は終わり、ギリシャの君主が世を掌握するようになるが、彼の死後に国は四つの王朝に分裂。その中の一国が神殿を汚すでしょう。しかし、その王は神に敵対して死ぬでしょう」と詳細を語りました。続いて、ガブリエルが別に語っていた「一週」の秘密について聞かせてくれました。

「その時にいたるまで、かつてなかったほどの悩みの時があるでしょう。しかし、その時あなたの民は救われます。すなわちあの書に名をしるされた者は皆救われます」（ダニエル 12:1）

その患難とは、次の箇所まで読むと、全世界の「終りの時」を描写していると考えられます。

「また地のちりの中に眠っている者のうち、多くの者は目をさますでしょう。そのうち永遠の生命にいたる者もあり、また恥と、限りなき恥辱をうける者もあるでしょう。賢い者は、大空の輝きのように輝き、また多くの人を義に導く者は、星のようになって永遠にいたるでしょう」（ダニエル 12:2～3）

そして、「終りの時」までの流れもダニエルに見せました。

「ダニエルよ、あなたは終りの時までこの言葉を秘し、この書を封じておきなさい。多くの者は、あちこちと探し調べ、そして知識が増すでしょう」（ダニエル 12:4）

たった一行だとしても、その間には二千年の時間が経過しています。兵士たちが乗っていた馬は自動車に変わり、多くの人が飛行機に乗って空を飛び回っています。鳩を飛ばして連絡を取り合っていた通信手段は、インターネットに変わり、リアルタイムに資料をやり取りできるようになりました。すべての人がスマートフォンで通話し、人工知能やビッグデータが「ホモ・サピエンス」の情報を保持し、人の代わりに処理を行っています。

「この異常なできごとは、いつになって終るでしょうか」（ダニエル 12:6）

こちら側の川岸で「いつになって終るのでしょうか」と訊くと、川の向こうにいる人が答えました。

「それは、ひと時とふた時と半時である。聖なる民を打ち碎く力が消え去る時に、これらの事はみな成就するだろう」（ダニエル 12:7）

彼が言う「ひと時とふた時と半時」は一週の半分のことですが、その半分の間に聖徒が消え去るとあります。聖徒がなぜ消え去るのか気になりますが、イエス様も天国に入る「八つの祝福」の最

後の部分で「迫害」に言及されています。

「義のために迫害されてきた人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである。わたしのために人々があなたがたをののしり、また迫害し、あなたがたに対し偽って様々な悪口を言う時には、あなたがたは、さいわいである。喜び、よろこべ、天においてあなたがたの受ける報いは大きい。あなたがたより前の預言者たちも、同じように迫害されたのである。」(マタイ 5:10～12)

この「八つの祝福」の閑門を通過した人たちは、その名が天に記録されます。

「わたしはあなたがたに、へびやさそりを踏みつけ、敵のあらゆる力に打ち勝つ権威を受けた。だから、あなたがたに害をおよぼす者はまったく無いであろう。しかし、靈があなたがたに服従することを喜ぶな。むしろ、あなたがたの名が天にしるされることを喜びなさい」(ルカ 10:19～20)

「信仰が見られるであろうか」

人間が災いに遭う最も大きな原因は「偶像礼拝」です。

「刻める像、鋳像および偽りを教える者は、その作者がこれを刻んだとてなんの益があろうか。その作者が物言わぬ偶像を造って、その造ったものに頼んでみても、なんの益があろうか。わざわいなるかな、木に向かって、さめよと言い、物言わぬ石に向かって、起きよと言う者よ。これは黙示を与え得ようか。見よ、これは金銀をきせたもので、その中には命の息は少しもない」(ハバクク 2:18～19)

今日の世界は、皆が「自己中心」に基づく思想と理念で行動しています。偶像が多いということは、つまり、神がいないのです。

「悪しき者は誇り顔をして、神を求めない。その思いに、すべて『神はない』という」(詩篇 10:4)

同性婚を認め、神の摂理に対抗する西欧の教会は、「人権」という名の偶像を祭る神殿になりました。その偶像が「差別禁止」を名目に真実な教会を迫害し、「宗教の自由」を理由に聖徒を虐待するようになりました。

「あなたがたに言っておくが、神はすみやかにさばいてくださるであろう。しかし、人の子が来るとき、地上に信仰が見られるであろうか」(ルカ 18:8)

イエス様は、真理に従うことに大胆でありますといわれました。

「あなたがたは、この世ではなやみがある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている」(ヨハネ 16:33 後半)

サタンの特徴は、目に見えるものをもってその威勢を誇示し、見る者たちに恐怖を覚えさせようとすることです。しかし、聖書はこういう脅威に騙されないようにと戒めています。

「愛する兄弟たちよ。思い違いをしてはいけない」(ヤコブ 1:16)
何より恐ろしいのは、自分自身を騙すことです。

「だれも自分を欺いてはならない」(I コリント 3:18 前半)

聖徒たちに勝利を得させる大きな力は、その方の愛から出ています。

「しかし、わたしたちを愛して下さったかたによって、わたしたちは、これらすべての事において勝ち得て余りがある」(ローマ 8:37)

しかし、ダニエルが聞いたように、聖徒の苦難は終わりの時まで続きます。ヨハネが書いた巻物の受取人であったアジアの七つの教会も、やはりすべての人が患難と迫害のゆえに苦しみを受けていました。ここでの「アジア」は、今のトルコ地域を指していますが、極東に住んでいる私たちもやはり注目すべき点です。

「あなたがわたしの右手に見た七つの星と、七つの金の燭台と

の奥義は、こうである。すなわち、七つの星は七つの教会の御使であり、七つの燭台は七つの教会である」（黙示録1:20）

偽の使徒たちと忍耐し戦っていたエペソ教会は、戦い続けることに疲れ果て、スマルナ教会は、「サタンの会堂」に属する者たちから迫害を受けていました。ペルガモ教会は誘惑に陥る者たちが続出し、テアテラ教会はみだらな教えが忍び込んでいました。サルデス教会はこの世と妥協して死んでおり、ヒラデルヒヤ教会はユダヤ人を自称する「サタンの会堂」から標的にされていました。物質的に豊かなラオデキヤ教会の信仰は生ぬるいものでした。

「耳のある者は、御靈が諸教会に言うことを聞くがよい」（黙示録2:29）

しかし、イエス様は、エペソ教会の勝利を得る者に命の木の実を与える、スマルナ教会の勝利を得る者を第二の死から保護し、ペルガモ教会の勝利を得る者には隠されたマナと白い石を与える、テアテラ教会の勝利を得る者には諸国民を支配する権威を授け、サルデス教会で勝利する者の名を御父の前で認め、ラオデキヤ教会の勝利を得る者には、その方の御座と共に着かせてくださると約束されました。

「そこで、あなたの見たこと、現在のこと、今後起ろうとすることを、書きとめなさい」（黙示録1:19）

アジアの七つの教会は実在していた教会ですが、ヨハネの巻物はこの世のさまざまな教会を複合的に記述しています。つまり、過去から現在に至るすべての教会は、七つの教会のいずれかにその性質が当てはまることになります。

「立て、さあ行こう」

人が生まれるときに産声を上げる理由は、前途多難な人生の先行きと、その先にある惨憺たる終末を予感しているからだという

人がいます。ダニエルが聞いた内容をみてみると、それは的中しているように思えます。

「それは、ひと時とふた時と半時である。聖なる民を打ち砕く力が消え去る時に、これらの事はみな成就するだろう」（ダニエル12:7）

ところで、七つの教会宛の手紙のあとは、ヨハネの黙示録には「教会」という言葉が出てきません。ヨハネよりも630年ほど前に『聖なる民を打ち砕く力が消え去る時まで』という啓示を受けたダニエルは、その意味が理解できずにもう一度訊ねました。

「わが主よ、これらの事の結末はどんなでしようか」（ダニエル12:8）

しかし、その質問への回答は「機密事項」として処理されました。

「ダニエルよ、あなたの道を行きなさい。この言葉は終りの時まで秘し、かつ封じておかれます」（ダニエル12:9）

そして、再び驚きの御言葉が添付されます。

「多くの者は、自分を清め、自分を白くし、かつ練られるでしょう」（ダニエル12:10前半）

塵から創られ、創造主の息吹を受けて靈となった人間が、その方と愛し合うようになるためには、向かい合えるレベルに達するまでの決められた訓練が必要でした。その訓練のために、あれほど遠くて長いドラマが続いたのです。創造主から選ばれた預言者たちが——「聞いても拒んでも」「時が良くても悪くても」——伝えた愛のメッセージを拒んだ者たちは、結局、燃える火の池に投げ込まれるでしょう。

「しかし、悪い者は悪い事をおこない、ひとりも悟ることはないが、賢い者は悟るでしょう」（ダニエル12:10後半）

その知恵は、「苦難」というへその緒をとおして、人の口に授けられる神の御言葉によって得られます。ダニエルに「終りの時」

について告げ知らしたその声は、もう一度「一週」の後半について言及します。

「常供の燔祭が取り除かれ、荒す憎むべきものが立てられる時から、千二百九十日が定められている。待っていて千三百三十五日に至る者はさいわいです。しかし、終りまであなたの道を行きなさい。あなたは休みに入り、定められた日の終りに立って、あなたの分を受けるでしょう」（ダニエル 12:11～13）

1290 日を太陽暦で換算しますと、約 3 年半の期間です。迫害を受けながらも、最後まで御言葉を守った聖徒はどうなるのでしょうか。

「ここに上ってきなさい」（黙示録 4:1 前半）

するとヨハネは、天の祭壇の下にいる大勢の人々を見ました。

「彼らは大きな患難をとおってきた人たちであって、その衣を小羊の血で洗い、それを白くしたのである。それだから彼らは、神の御座の前におり、昼も夜もその聖所で神に仕えているのである。御座にいますかたは、彼らの上に幕屋を張って共に住まわれるであろう」（黙示録 7:14～15）

御使いたちがラッパを吹いている間、ヨハネはまた「ふたりの証人」の姿を見ました。ゼカリヤが見た二本のオリーブの木がヨハネの前に再び現れたのです。

『そしてわたしは、わたしのふたりの証人に、荒布を着て、千二百六十日のあいだ預言することを許そう』。彼らは、全地の主のみまえに立っている二本のオリーブの木、また、二つの燭台である。もし彼らに害を加えようとする者があれば、彼らの口から火が出て、その敵を滅ぼすであろう。もし彼らに害を加えようとする者があれば、その者はこのように殺されねばならない」（黙示録 11:3～5）

ヨハネが見た二本のオリーブの木についてはさまざまな解釈が



あります。変貌山に現れたモーセとエリヤ、つまり、この地にお墓を残していない二人の預言者だという人がいます。個人のことではなく、「残された者たち（レムナント）」、つまり、聖徒を意味するという人もいます。真理の最後の守備隊ともいえる

彼らは獸との戦いで死ぬことになりますが、再びよみがえります。

「ここに上ってきなさい」（黙示録 11:12）

天から大きな声が聞こえると、ふたりの証人は雲に乗って天に上っていきます。使徒ヨハネとふたりの証人を連れて行ったその声が、すべての聖徒たちに臨むようになります。

「立て、さあ行こう」（マタイ 26:46）

イエス様が捕らえられる前に、弟子たちに語られたその言葉が再び希望の御言葉として臨みます。使徒パウロはその声をすでに聞いていました。

「すなわち、主ご自身が天使のかしらの声と神のラッパの鳴り響くうちに、合図の声で、天から下ってこられる。その時、キリストにあって死んだ人々が、まず最初によみがえり、それから生き残っているわたしたちが、彼らと共に雲に包まれて引き上げられ、空中で主に会い、こうして、いつも主と共にいるであろう。だから、あなたがたは、これらの言葉をもって互に慰め合いなさい」（I デサロニケ 4:16～18）

竜の権勢を受けて勝ったと思っていた獸は、自分が負けたことを悟ります。

「そこで、彼は口を開いて神を汚し、神の御名と、その幕屋、すなわち、天に住む者たちとを汚した」（黙示録 13:6）

七つのラッパに続き、七つの鉢の災いによって地と海は徹底的

に破壊され、遂に「ハルマグドン」において最後の戦いが起こります（黙示録 16:16）。全世界の王たちが集まり戦火が切られるその時、第七の御使いが最後の鉢を空中にぶちまけます。

「すると、いなずまと、もろもろの声と、雷鳴とが起り、また激しい地震があった。それは人間が地上にあらわれて以来、かつてなかったようなもので、それほどに激しい地震であった」（黙示録 16:18）

そして、サタンの都バビロンは崩壊します。

「倒れた、大いなるバビロンは倒れた。そして、それは悪魔の住む所、あらゆる汚れた靈の巣くつ、また、あらゆる汚れた憎むべき鳥の巣くつとなつた」（黙示録 18:2）

遂にそのバビロンは歴史から姿を消しました。

「すると、ひとりの力強い御使が、大きなひきうすのような石を持ちあげ、それを海に投げ込んで言った、『大いなる都バビロンは、このように激しく打ち倒され、そして、全く姿を消してしまう』」（黙示録 18:21）

その時、御座に着かれた方が言われます。

「事はすでに成った。わたしは、アルパでありオメガである。初めであり終りである。かわいている者には、いのちの水の泉から価なしに飲ませよう。勝利を得る者は、これらのものを受け継ぐであろう。わたしは彼の神となり、彼はわたしの子となる」（黙示録 21:6～7）†



キム・ソンイル 小説家

1961年に『現代文学』で文壇デビュー。作家でありながら、デウ重工業の取締役も務める。主にキリスト教小説と推理、歴史小説を執筆し、キリスト教文学者として有名。著書は『聖書との出会い』『聖書で開く世界史1、2、3』『一つにならしめてください』『文化戦争の時代』『第三日の望み』など。



イエス院第四の川 (The Fourth River) プロジェクト
統一時代を開く

ベン・トレイ イエス院理事長・サンスリヨンセンター本部長



正しい質問

ここ数カ月間、私たちは預言と峻別について学びながら、神の御言葉を聞き、他の人々の証しを分かち合っています。

最近、妻がジョン・ファイパー牧師の「サマリヤの女性」に関する説教を聞きました。妻が新たに悟ったことをいくつか分かち合いながら、「質問すること」について考えるようになりました。それで「聞くこと」から一歩進んで、「訊くこと」について考えてみたいと思います。真理である神様により近づくための質問をしているでしょうか？ また、神様は私たちにどのように問いかけておられるでしょうか？

サマリヤへ向かわれたイエス様

まず、ヨハネによる福音書4章1～43節の背景をみてみましょう。イエス様と弟子たちはユダヤの地で説教をし、洗礼を授けていました。イエス様とバプテスマのヨハネが人々に洗礼を授けていたとき、人々はこの二人を比べ始めたのです。そこでイエス様はガリラヤに戻ろうと決められました。

当時のユダヤ人は、南のユダと北のガリラヤの間を旅する際、サマリヤを通る近道を選びませんでした。ユダヤ人からしたら、サマリヤ人は異端であり、偽のイスラエル人だったからです。

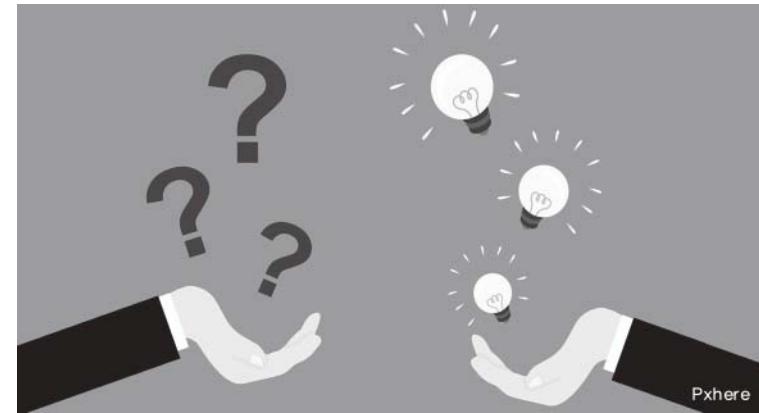
サマリヤ版のトーラーは、ユダヤ人が伝承していたトーラーとは異なりました。それでユダヤ人は、サマリヤ人を異邦人よりさらに好ましくない存在として認識し、偽りに汚染されないよう彼らとの接触を避けました。汚染される危険を冒すより、エルサレムからエリコに向かう迂回路（ユダヤの荒野を通って乾燥した曲がりくねった道を 1000 m も下る）の長く辛い道を選びました。再びガリラヤに上るまで、高温多湿なヨルダン川の北側の道を通りなければなりませんでした。

同章 4 節を読むと、イエス様が意図的にサマリヤを通って行かれたことがわかります。これは弟子たちを混乱させたに違いありません。イエス様と弟子たちがヤコブの井戸に着き、イエス様がそこで休んでおられる間、弟子たちは食物を買いに町に出かけました。そして、ご存知のように、暗い過去を持つサマリヤ人女性が水を汲みに来ました。一日で最も暑い時間帯でした。おそらく、その女性は他人からの悪口や排斥などの面倒を避けるために、涼しい朝夕ではなく、あえて暑い時間に水を汲みに来たのでしょう。

同章 7 節で、イエス様はその女性に「水を飲ませてください」と言われました。彼女は、イエス様が見知らぬ男性、そして最も驚くべきことにユダヤ人だったので（おそらく、律法に規定された衣服の装飾を見てわかったのでしょう、民数記 15:38 ~ 39 参照）、彼女は驚いて訊ねました。

「あなたはユダヤ人でありながら、どうしてサマリヤの女の私に、飲ませてくれとおっしゃるのですか？」

それに対してイエス様は、その女性にご自身が誰なのかわからぬようにしながら、女性の質問とは無関係の回答をされました。



女性は、イエス様が彼女に何を与えられるのかを全く知りません。即時的かつ実質的な必要性に焦点を合わせた女性の質問に対し、イエス様の回答は「二度と渴かない水」に関するものでした。

イエス様は引き続き靈的で永遠なことについて語られますが、彼女は引き続き現実的なこととして捉えます。ようやく、イエス様が流れる泉についておっしゃっているとわかった彼女は、イエス様に「生ける水」を求めました。そうすれば、井戸に来る必要がなくなるからです。

今までの会話を振り返りながら、質問とその返答について考えてみましょう。イエス様は社会的慣習を破って、サマリヤ人女性と対話を始めました。社会の片隅にいる疎外されたサマリヤ人女性を、意図的に対話に参加させたのです。

ところが、イエス様に対する彼女の最初の反応は、自己中心的でした。一方、女性に対するイエス様の反応は、彼女をより深い対話へ導こうとするものでした。「狭い箱から外へ出なさい」と、主は私たちにも語りかけておられるのではないでしょうか。

次にイエス様は話題を変え、「あなたの夫を呼びに行って、こ



Pxhere

こに連れてきなさい」（16節）と言われました。警戒心を緩めていた女性は「私には夫はありません」と真実を打ち明けました。これに対してイエス様は「夫がないと言ったのは、もっともです」と話されました。

この時のイエス様はより深い真実、すなわち彼女には過去に5人の夫がいて、6人目の男性とは結婚外の関係であることを指摘されました。彼女の人生が露わになり、彼女にとってイエス様は「私のしたことを何もかも言いあてた人」（29節）になりました。すると、女性の反応はどうなったでしょうか？ 私たちが皆そうであるように、彼女は一般的な問題、すなわちサマリヤ人とユダヤ人の神学的な違いを質問することにより、個人的な話題を避けました。

それで、「神様を礼拝するのに適した場所はどこですか？」と訊ねます。しかし、イエス様は彼女が訊ねた神学的な質問には触れず、だからといって、女性の結婚問題にも立ち入ろうとはされませんでした。

イエス様はより深い真理の問題を取り扱います。イエス様の関心は、律法が文字通り守られているかではなく、異端のサマリヤ人が誤った教理を助長しているかでもありません。イエス様は、サマリヤ人であれユダヤ人であれ、人の心に关心があるのです。

「イエスは女に言われた、『女よ、わたしの言うことを信じなさい。あなたがたが、この山でも、またエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。あなたがたは自分の知らないものを拝んでいるが、わたしたちは知っているかたを礼拝している。救いはユダヤ人から来るからである。しかし、まことの礼拝をする者たちが、靈とまこととをもって父を礼拝する時が来る。そうだ、今

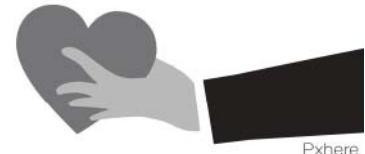
きている。父は、このような礼拝をする者たちを求めておられるからである。』」（ヨハネ4:21～23）

イエス様の関心

イエス様は、規則と教理以上に人に深い関心を持っておられ、それがサマリヤ人女性の心を動かしました。その時、非常に興味深いことが起きたのです。サマリヤ人女性が水がめを置いて急いで町に行っている間に、弟子たちが戻ってきました。彼らは混乱し、何が起きたのか互いに訊ね合いますが、実際に何が起きたのかをイエス様に訊ねることは恐れました。

女性が町に着いたとき、聖靈の深い感動を受けた彼女は自らを抑えることができず、ユダヤ人とサマリヤ人、すべての人が待っていたメシヤが現れたかもしれないと、この驚くべき預言者のことを人々に話し始めました。彼女の話には非常に説得力があったので、人々はその人を見るために井戸までやって来ました。その時、状況をまだ理解できていない弟子たちに向かって、「目を上げて向かって来る『収穫』を見なさい」と、イエス様は言われました。この人々は、イエス様と接触したことで信じるようになった『収穫』なのです。（42節）

その後、イエス様はサマリヤ人の家で食事をし、二日間滞在されました。正統なユダヤ教の伝統に反することをされたのです。ここでは教理と律法は重要ではありません。それらはすべて消え



Pxhere

去るでしょう。重要なのは、救いはユダヤ人から来るという真理から断絶され、疎外され、孤立していた人々が、信仰に至ることです。律法を固く守る正統なユダヤ人になるのではなく、サマリヤ人のままであっても、肉体となられた御言葉であり、律法自体であるイエス様に出会うことが重要なのです。

教理の違いによる分裂があまりにも多くあり、異端や異教に対して心配の多い時代、この話を默想しながら、神様が私たちに何を語っておられるのかを考えてみましょう。

私たちはどのような質問をしていますか？ 心の問題、魂の問題からすると、イエス様にとって規則や教理は副次的なものです。私たちは、教えや実体の違いに関する質問に囚われていませんか？ イエス様と直接関係を結べる質問をしていますか？ 靈とまことによって父を礼拝する真の意味を考えるのを避けるため、正統や異端という付随的な問題に关心を持ち過ぎていませんか？ 論争はさておき、私たちに実際に会ってくださる方を礼拝するために集うことができていますか？ 生きている御言葉であり、愛であられる神様に会うとき、他のすべてのものは消え去るのです。

「愛はいつまでも絶えることがない。しかし、預言はすたれ、異言はやみ、知識はすたれるであろう。なぜなら、わたしたちの知るところは一部分であり、預言するところも一部分にすぎない。全きものが来る時には、部分的なものはすたれる。」（第一コリント 13:8～10）

やがては朽ちるこの世のことに関する質問を取り下げ、常に全きものへと進みましょう。†

✿ ドタバタ子育ての話

イ・ビョンジュン 牧師／ラランリボン カウンセリング＆コーチング代表 心理相談学博士



耳を傾ける
ことのできる
子どもに育てなさい

Adobe Stock

言うことを聞かず成長が止まった子どもたち

「なぜ、お父さん（お母さん）の言うことを聞かなければならないの？」

最近、小学生になったばかりの子どもでもこのように言います。中高生は言うまでもありません。彼らが普段から「嫌だ」「知らねえ」「つまらない」「うざい」「むかつくな」と言うのは日常茶飯事で、「マジで腹立つ」「ペアで大騒ぎだな」という俗語も多くあります。

「マジで腹立つ・むかつくな」とは、怒りが頭のてっぺんまで来ているという意味で、「ペアで」とは両親のこと指しています。カカオトークの内容そのままです。私は2012年に『大きくなっ

た子どものサガジコーチング』、2020年に『王になった子どものサガジコーチング』を執筆しました。この本を読んだ、「子どもをどう扱うべきかを教えてほしい」という親と多く会ってきました。

直接見聞きする最近の子どもたちの特性は、親の言うことを絶対に聞きません。「聞かない、逆らう、反抗する」というのは、まだ可愛いものです。親を見下し、あざ笑い、悪口や過激な発言を繰り返します。親はしもべか雑用係、もしくは「卑しいもの」に成り下がっています。子どもが親の言うことに聞き従うのは、はるか昔の話になりました。その原因は何であり、どのように対処できるでしょうか。

聰明さがない子どもたち

最近の子どもたちが親の言うことを聞かない理由は、幼い頃から過度な子ども中心の教育方法で育ったからです。このパラダイムは保育園（幼稚園）から小学校へそのままつながっています。また、学校ではS(Stimulus)-R(Response)の理論に基づき、徹底した科学的理論が教え込まれ、全てのことを物質的に捉える目が形成されます。そのため、親の愛や献身は物質的な次元に置き換えられ、親と自分たちと同じ水準に置くことさえ飛び越えて、下の者と見なすようになります。

彼らは利己的で損得に敏感で、損を甘受することや譲歩する美德はその概念さえありません。そのため、家で親の言うことに逆らうだけでなく、同級生も敵のように見なすことが多いのです。

教育とは本来、考える人間、徳を備えた人間、知恵ある人間を養成することであり、その基本は「聞くこと」にあります。「聞く」という概念には、垂直的な人間関係が含まれています。子どもたちに聰明さを望むのは、どの親にも共通の願いでしょうが、本當

にそのように望むのならば、「聞く」子どもに育てなければなりません。

聰明とは「耳が明るい（聰）」と「明るい（明）」の組み合わせであり、聰は耳が明るく、明は目が明るいという意味です。聰は話の内容を素早く理解し、状況把握が早く、機転が利くことであり、臨機応変さに長けていることを指します。一方で、相対的な教育である「明」は、利口に計算はするのですが、知恵のある統合的な思考には至りません。

最近、アメリカでは精神異常者の銃乱射によって、罪のない人々が犠牲になる事件が頻発しており、それは中学高校でも起きています。私はその理由について、いつもこのように話しています。

「アメリカでは、『聞く教育』ではなく『見る教育』だけを受けさせたために、聰明な子どもが育ったのではなく、銃を持って暴れる人間が作り出されたのです」

十戒の第五戒が「父母を敬いなさい」である理由

十戒の第五戒は「父母を敬いなさい」ですが、最近の子どもたちは「父母を攻撃しなさい」に変えています。子どもの無差別攻撃により満身創痍の親が増えています。十戒は、神と人との関係（1～4戒）と、人と人の関係（5～10戒）に分かれています。それらを結ぶ帶が第五戒です。すなわち、聖書は神と父母の座を同一線上に置き、父母を敬わない人が神を敬うことはできず、神を敬う人は父母をむやみに扱うことはできないと、明確に語っているのです。

神様によく仕える原理と、父母によく仕える原理は同じです。よく聞いて従うことです。神の民となる第一条件も同じです。創世記で神様がアブラハムを選ばれた理由もまさにそうでした。

「アブラハムは必ず大きな強い国民となって、地のすべての民

がみな、彼によって祝福を受けるのではないか。わたしは彼が後の子らと家族とに命じて主の道を守らせ、正義と公道とを行わせるために彼を知ったのである。これは主がかつてアブラハムについて言った事を彼の上に臨ませるためである」（創世記 18:18-19）

神様は御自身の言葉を「聞いて」従順する民の代表として、アブラハムを選ばれました。しかし、残念なことに選ばれし民イスラエルは、あまり「言うことを聞かない」「強情な」民でした。そのため、神様は絶えず預言者を送り、イスラエルの民に「聞くこと」を要求されました。聖書には「私の民よ、わたしの言うことを聞きなさい」「イスラエルよ、聞け」「エルサレムに住む者よ、主の言葉を聞きなさい」という表現が数多く登場し、イエス様も「聞く耳のある者は聞きなさい」とおっしゃっています。

大きくなった子どもには「Yes, But」話法を使わせなさい

親の言うことをよく聞く子どもに育てるためには、幼い頃から親の言うことには無条件で「はい」と答える訓練をさせなければなりません。そして、ある程度成長して自己主張したい場合は、「Yes, But」手法を使うように教えます。親が言ったらまず「はい」と返事してから自分の立場を説明し、交渉するのです。「はい」が抜けて、「しかし」だけを言うと不従順になり、親の権威が消えて、子どもは横柄になります。「今すぐ部屋を片付けなさい」と言うと、まず子どもは「はい (Yes)」と答えなければなりません。もし状況が思わしくなくても、「はい (Yes)」と先に答えてから、続けて「しかし (But)」を使わなければなりません。「今は手を離せないので、10分後に片付けてもいいですか?」と言って、親の同意を得なければなりません。

「Yes」と言うときに「Copy する手法」を使わせるのもいいでしょ

う。「今すぐ部屋を片付けなさい」と言ったあと、コピーするように親の言葉を繰り返し言わせるのです。「はい (Yes)。今すぐ部屋を片付けなさいと (copy) おっしゃいましたね?」そして、子どもは今すぐ実行するか、状況が思わしくないときは、But を使って時間を調整するかしなければなりません。そしてこそ親の権威が保たれ、権威があつてこそ言葉に力があるようになります。親の言葉に「はい」という訓練をする時期は、早いほどよいです。自意識が芽生える前に、親に従順することを学ばなければならないからです。そして、子どもには親に対し必ず敬語を使わせなければなりません。

子どもたちに信仰を継承するためにも、幼い頃からよく耳を傾ける子どもに育てる必要があります。耳を傾けない人には垂直の概念がないため、理解の浅い人にならざるを得ず、心理的な土壌が浅い人には、哲学や宗教という抽象的概念の入る余地がありません。

アメリカの教育家で著述家であり、講演者で靈的指導者でもあるデビッド・ホーキンス (David Hawkins) 博士は、自身の著書『意識革命』をとおして、人の意識レベルを測定する手段として宗教に対する態度を取り上げています。宗教を持たなくとも、宗教に対する基本的な畏敬心を持った人は高いレベルの人ですが、宗教そのものや信仰者を軽蔑する人は最もレベルの低い人であると述べています。

宗教の基本は「絶対服従」という垂直的次元であるにもかかわらず、それはむしろ目に見えない内面の豊かさと平安、幸せを得る通路です。耳を傾ける人であればこそ、この幸福な世界に入ることができますが、そうでない人は決して入ることのできない世界です。つまり、「聞くこと」は幸せの世界であり、悟りの世界なのです。†

発行：純福音東京教会 文書宣教会・しなんげ出版部

【翻 訳】：趙 榮珍 執事、李カレン 執事、林 俊秀 教育生、李 珍 執事、金原英興 按手執事、

朴 宰完 按手執事、青年部翻訳チーム、金澤由紀子 助士

【日本語校正】：垣内温子姉妹、篠崎 栄姉妹、今村和世 執事、吉田綾子 執事、向川 誉 執事、

澤田義則 執事

【印刷・製本】：間杉典生 按手執事

【再 編 集】：金澤由紀子 助士

【監 修】：武石哲夫 按手執事

愛する者よ。あなたのたましいがいつも恵まれていると同じく、あなたがすべてのことに恵まれ、またすこやかであるようにと、わたしは祈っている。(ヨハネ 1:2)



しなんげ

6
2021

純福音東京教会 文書宣教会・しなんげ出版部

〒160-0021 東京都新宿区歌舞伎町2-2-19 Tel.03-3232-0067 Fax.03-3232-0729 www.fgtc.jp

Full Gospel Tokyo Church